『日本アジア研究』第 18 号（2021 年 3 月）

ノの有無による文末ダロウ類の使い分けについて
――日本語母語話者作文の使用実態から――

松本匡史*

本稿では，文末に現れるいわゆる推量用法のダロウとノダロウの使い分けについての考察を行った．ノダロウには従来，いわゆる原因推量と結果推量があると言われていた．本稿では JCK コーパスの日本語母語話者作文の使用実態から，これら以外の用法があることが明らかになり，ノダの機能からいくつかに分類することができた．

本稿では，ノダロウを前提や先行文（群）または後文（群）と関連づけ，書き手の意見を言い切らず非断定の形で述べるものと考える．そしてノダロウには前方に機能を効かす非断定換言，非断定見解，非断定結論，非断定原因・理由と，後方に機能を効かす非断定概略があることを示した．そして，ダロウとノダロウの産出のための使い分けルールをある程度整理し提示することができた．

非断定換言，非断定見解，非断定原因・理由のノダロウは，ダロウに置き換えると文脈上不自然さが見られる．非断定結論，非断定概略のノダロウは，ダロウに置き換えることができるが違いも見られる．非断定結論のノダロウは「既に定まったこと」というニュアンスの違いがあり，非断定概略のノダロウは読み手を惹きつけるという表現効果がある．そのため，非断定結論のノダロウで帰結（未来のことなど）を述べる場合や，非断定概略のノダロウの後文で話題の展開がないと不自然になるという産出時に注意すべき事柄が見られた．

キーワード：ノダロウ，ノダ，JCK コーパス

1．はじめに

日本語の文末などに付される「のだ／んだ」という，いわゆるノダ文という文法項目がある．これは，外国人学習者に日本語を教える日本語教育において，指導が非常に難しい文法項目であることは，多くの日本語教師が実感していることであろう．この問題はノダ文の持つ多種多様な意味機能によるところにある．それゆえに，日本語学において数多くの研究がなされており，母語話者として納得できるものも多い．

* まつもと・まさふみ，埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程

しかし，ノダ文の周辺形式といわれる「のだろう」「のかもしれない」など，ある文法項目にノダ文の「の」が上接するもの（以下「ノ＋形式」）の説明は十分とは言えない．野田（1997：212）では，「「のだろう」は，基本的に，対事的「のだ」の機能と「だろう」の機能をあわせたものだと考えてよい．「のにちがいない」「のかもしれない」も同様である」と述べられており，このようにノダ文研究では周辺形式である「ノ＋形式」に多くの説明を割くことはあまりされていない．本研究は「ノ＋形式」を対象とし，その使用実態からの使い分けを明らかにするものであるが，本稿ではその中でも「のだろう」に焦点を当てる．「のだろう」以外の「ノ＋形式」については稿を改めて述べたい．

「のだろう」をメインテーマとして扱った先行研究はノダ文に比べあまり多くないが，奥田（1984, 1985），大鹿（1995），幸松（2015），金（2019）などが挙げられる．これらはいずれも説明としては納得できるものだが，外国人日本語学習者や日本語教師という視点から見ると複雑で日本語教育に応用が難しいと感じる．

庵（2015：20）では日本語記述文法（母語話者のための文法）と日本語教育文法（非母語話者のための文法）の違いについて，前者は「母語話者に対する説明では，母語話者の内省に依存した説明が可能」であり，後者は「非母語話者に対する説明では，こうした内省に依存した説明はできない．（中略）非母語話者に対する説明は，母語話者に対する説明とは（全く）異なるものと考えるべきである」と述べられている．これを踏まえ「のだろう」についての研究を見てみると，日本語教育文法としてはまだ不十分であると考える．そのため，本稿の目的は，ノダ文の周辺形式である「ノダロウ」と「ダロウ」[1]の使い分けを日本語母語話者作文の使用実態から探ることにある．そしてそれをまとめ，非母語話者が産出するための使い分けのルール[2]を提示することにある．これは言い換えれば，「ノダロウ」の産出条件を使用実態からまとめ，学習者に理解しやすい形にするということである．

2．先行研究

2.1　関連研究概観

ここではまずノダロウに関する先行研究を概観する．

ノダロウについての研究には大別すると 2 つの流れがある．1 つはノダ文研究の流れを汲むものである．これはノダ文研究の一部としてノダロウを位置付けており，ノダの推量形と述べられることが多い．ノダの意味機能（これ自体が各研究で様々だが）を引き継いだ推量の形式という扱いである．これは主に田野村（1990），野田（1997）などが挙げられる．次にもう 1 つ，推量及びモダリティ研究の流れからのものである．これは主にダロウ研究をメインテーマとしたもので，その一部としてノダロウを扱う場合である．これは主に奥田（1984, 1985），大鹿（1995）などが挙げられる．しかし，いくつかのダロウ研究ではノダロウを調査対象外やダロウと区別されずに扱われているものも見られる[3]．

ここからは個別にノダロウ研究を見ていく．

学習者向けの辞典である『日本語文型辞典』（グループ・ジャマシイ 1998：468−469）では，ノダロウは「「のだ」と「だろう」が組み合わされた形．（中略）下降調のイントネーションを伴って，推量を表す．「だろう」の前に「の」が入ると，理由や原因についての推測など，ある出来事についての話し手の状況判断がふくまれる」と述べられている．いくつかの先行研究の細かな主張の違いを除けば大方のノダロウ研究では理由や原因を推量[4]するという意味機能は一致している．以下，このような機能をひとまず原因推量と呼ぶ．

そして，幸松（2015）が主張する「〈既定事態推量〉のノダロウ」[5]もある．幸松（2015）では理由や原因を推量するような意味機能を「〈事情推量〉のノダロウ」とし，それとは別に事情を推量しないノダロウを「〈既定事態推量〉のノダロウ」としている．（1）がそれに当たる．以下，このような機能をひとまず結果推量と呼ぶ．

（1）　（聴覚障碍者の少年にサインをあげた後で）少年はそれを受け取ると，嬉しそうにまた表情を動かし，口を動かした．
手を振って別れたあとで，内藤が言った．「嬉しいね」（中略）
すると内藤は，別に誰に聞かせるふうでもなく呟いた．あの子は，
一生苦労するんだろうな……　（幸松 2015：5）[6]

（1）のノダロウはダロウと置き換えられ，「どちらも単純な推量であることには変わりないが，より中立的な推量であるダロウ文に対して，ノダロウ文の方は，あたかも，推量した事態，すなわち命題事態が，「そうなることがすでに決定している事態であるかのように述べている」というニュアンスを感じる」（幸松 2015：6）と述べられており，細かなニュアンスの差があるとされる．

ノダロウの先行研究をまとめると，ノダロウの意味機能には 2 つあり，1 つはある事象（所与）を受けてその原因や理由を推量する，もう 1 つはある所与を受けてその結果を推量することである．

これらに加え，ノダロウには野田（1997）で述べられたようなスコープの「の（だ）」に相当する機能も見られる．中畠（1997）や金（2019）で述べられたように，ダロウは前接要素を推量の対象とするため，それ以外を推量対象とするにはノダロウとしなければならないという指摘である．

大まかにまとめると，これまでのノダロウ研究では上述のようなことが明らかにされてきた．これらの研究は非常に説得力のあるものであり，納得できるものであったが，非母語話者の産出の手助けとなるようなルールが提示されているかと問われれば首肯し難い面もある．例えば，『日本語文型辞典』のように，「「だろう」の前に「の」が入ると，理由や原因についての推測」という機能だけなら，理由・原因を推量する際にはダロウの前にノを挿入するという簡潔なルールで十分であるが，実際にはそれ以外の使用も見られる．用例（1）のように結果の推量にも使われる場合があるからである．結果推量はダ

ロウとの置き換えが可能なため，ノの有無の使い分けについてのルールが必要となってくる．幸松（2015）が述べたように，結果推量にノダロウを使用した場合，「そうなることがすでに決定している事態であるかのように述べている」ニュアンスは感じられるが，これは理解のための知識であり，産出のためのルールではないと考える．これだけを産出のためのルールと規定すると，つまり話し手が既定の事態であるかのように述べたい場合にはダロウの代わりにノダロウの使用が可能となるとなってしまう．そのように規定すると，話し手の気持ちでノダロウを使用することになってしまい，学習者の誤用につながる恐れがある．

金（2019）などのノダロウによるスコープの拡張という論は非常に興味深いもので，推量の焦点がノによって変わることはその通りであるが，意味論・構文論的なため母語話者の内省に依拠しており，これを学習者に提示し産出に用いることはやや複雑であると思われる．

これらを踏まえ，本稿ではノの有無によるダロウ類の使い分けルールを日本語母語話者の作文からまとめ，それを理解しやすい形で提示することである．これは言い換えれば，「ノダロウ」の産出条件を使用実態からまとめ，学習者に理解しやすい形にまとめるということである．

2.2　ノダロウ研究の問題点

ここでは，ノダロウの産出という面から見た先行研究の問題点を 4 つ指摘し本稿の具体的な目的とする．先行研究ではノダロウの産出についてのルールのようなものを述べているものはほとんど見られないが，先行研究の記述が産出のルールに用いることができるのかどうかという観点から考えてみる．

まずは産出条件とテンスの問題である．宮崎（2012）では，認識的モダリティ[7]とテンスとの間に偏った出現傾向があると述べられている．表 1 は宮崎（2012：30）の表 1 と 2 を基にしたものである．

表 1　認識的モダリティ別の出現度数と比率（宮崎 2012：30）

	スル	シタ	シテイル	シテイタ	計
だろう	104 (73.2%)	19 (13.4%)	13 (9.2%)	6 (4.2%)	142 (100%)
のだろう	20 (15.6%)	60 (46.9%)	23 (18.0%)	25 (19.5%)	128 (100%)

表 1 から，ダロウは上接する動詞がスル（ル形）と，ノダロウはシタ（タ形）と共起しやすいことが分かる．

テンスとの関係については幸松（2015：20）にも，「本研究のために収集したダロウ文（14,412 例）における～シタダロウの割合は約 6%であり（中略）〈過去〉を推量する文は非常に少数であった．同コーパスによるノダロウ文（4,201 例）における～シタノダロウは 43.7%であり，差は歴然としている．逆にノダロウ文で〈未来〉を推量している文を抽出すると，全体 5%未満」であると指摘されている．

もちろん，テンスとの関係は結果であり，ノダロウとダロウの本質ではないだろうが，このような記述を見るとテンスとの間になんらかの産出ルールがありそうであるが，果たしてこれを使い分けルールとして提示できるだろうか．

次に結果推量の使い分けについてである．幸松（2015：4）では「日本語において，「所与の事情として推量するか否か」という対立は相補的なものであり，事情として推量する以上は，〈事情推量〉のノダロウを，事情として推量しているのでなければダロウを用いなければならない．（中略）この使い分けは日本語において厳しく守られている文法項目である」と述べられている．

大鹿（1995）にも，ダロウは「根拠とする事態から言えば，その帰結・結果を想定する，即ち帰結・結果推量と言ってもいいものである」（p.535）とされ，ノダロウは「もし，帰結・原因推量というのであれば，この「のだろう」という形式こそがその機能を持っているというべきであろう」（p.543）と述べられている．これは，ノダロウは判断の根拠となる事象（所与）を帰結・結果とし，そこから判断の内容としての理由・原因を推量する機能を持つということである．そしてダロウは判断の根拠となる事象（所与）を原因・理由とし，そこから判断の内容としての帰結・結果を推量する機能を持つということである．このような記述からも，ノダロウは原因推量で，ダロウは結果推量という機能による使い分けが言えそうであるが，実際にはそうではない．

幸松（2015）でも指摘されているように，「〈既定事態推量〉のノダロウ」というものがある．これは上述したように（用例（1）），いわゆる結果推量であるにもかかわらず，ノダロウが使えるという事例である．つまり，原因推量はノダロウが担っているが，結果推量はノダロウとダロウが担っているということである．そのため，結果推量の際の産出のための使い分けルールが必要となってくる．

次に，ノダロウには原因推量と結果推量以外に使えるものがないのだろうかという疑問がある．これは原因推量，結果推量というラベリングに対する疑義でもある．

（2）　確かに，よくメディアなどから女性が金銭的余裕差を求める傾向にあると聞いたことがある．高望みをする結果，結婚相手が見つからない，と考えるのかもしれない．
もっと狭い範囲で言えば，地域コミュニティの崩壊というのも考えられるのだろう．（j11-2-9）[8]

用例（2）は本稿で用いるJCKコーパスからの実例である．「地域コミュニティの崩壊というのも考えられるのだろう」という推量は一体何に対する理由または結果なのだろうか．理由や結果を推量する以外のラベリングが必要ではないかと考える．

最後に，各先行研究ではダロウやノダロウの特徴はある程度記述されてきた．ただそれを産出のための使い分けルールとして提示できるかは上述のよ

うに疑問が残る．これらの問題点を以下のようにまとめ，本稿の具体的な目的とする．

【ノダロウ産出に関する問題点】

① 使い分けルールとして，ダロウはル形，ノダロウはタ形が上接するということができるのか．

② ノダロウは原因推量と結果推量の機能を持ち，ダロウは結果推量の機能を持つ．それでは結果推量をする際，どのような使い分けルールを提示すれば良いだろうか．

③ 結果推量以外，ノダロウとダロウが置き換えができる，またはできないのはどのような場合か．

④ 上記をまとめた使い分けルールの提示ができるか．

３．使用実態調査

3.1　調査対象

本稿では日本語母語話者作文を対象とするが，その理由をまず述べる．

ダロウ類にはいくつかの意味機能が備わっている[9]．庵（2009）では日本語母語話者コーパス[10]をもとに，会話における「でしょう（だろう）」の使用実態を調査した．それによると，会話では「でしょう（だろう）」の推量用法は確認用法に比べ非常に少ないことが示された．

このような結果からも会話において推量のダロウの使用頻度が低いことは明らかである．しかし，馮（2019）による BCCWJ[11]を対象とした調査では推量用法が 46%[12]を占めていることが示された．これは話しことばと書きことばの性質の違いと考えられ，推量のダロウは書きことばにおいてその存在意義を強く主張するものである．そして，「ノ」というたった一音節の違いは話しことばでは見逃されてあまり重要性を持たないのかもしれないが，書きことばでは非常に重要な意味を持ってくる．

そこで本稿では，学習者の産出機会を考えたとき，日本の大学などに進学する学習者を念頭に，レポートや論文，作文などの書きことばに用いる機会が多い推量用法のダロウを本稿の対象とする．そして，そのような学習者が作文などを書く機会において，産出の手助けとなるような使い分けルールを提示することを目的とするため，本稿では日本語母語話者作文を調査対象とし，検索語は誤記を考慮し「だろ」「でしょ」「であろ」とする．

BCCWJ は日本における書きことば最大のコーパスであるが，学習者にとっては産出する必要がなく理解のみで充分なデータもあり，本稿の目的には適さないと考える．そのため，本調査では日本語母語話者と非母語話者の作文データが揃っている『JCK 作文コーパス』[13]を対象とし，特に本稿では推量用法の（ノ）ダロウについて述べる．なお，不定推量にあたる（ノ）ダロウカ類についての考察，非母語話者作文の分析は紙幅の関係上，稿を改めて述べたい．

3.2　分析の枠組み

調査結果の概観はキャアコップチャイ（2010）を用い，結果の詳細な分析には宮澤（2014, 2018）を援用する．

はじめにキャアコップチャイ（2010）を簡単に説明する．キャアコップチャイ（2010）は，2000 年以降に刊行された 8 つの小説作品を対象とし，使用実態からダロウ類の用法を分類したものである．多数の実際の使用例から用法を分類しており，現実に則した分類である．ダロウ類を大きく 5 つの用法に整理し，その下位にもいくつかの用法を分類している．しかしながら，キャアコップチャイ（2010）は小説を対象としているため会話文で使われる確認用法も多く，本稿が目的とする書きことばの推量用法の細かな分析はなされていない．それに加え，ノダロウを対象外としているため，本稿の目的に直接には資さないが，ダロウ類のある一定の分類基準とし調査結果を概観するため援用する．

【キャアコップチャイ（2010）のダロウ類の用法分類】

①推量用法

②確認用法

・「聞き手への確かめ」「聞き手に対する気付かせ」「話し手の押し付け」に下位分類される．

③疑念用法

・疑問要素の終助詞「カ」または疑問詞が共起する．

・「自問」「断定回避」「反語」に下位分類される．

④婉曲的質問用法

⑤感動用法

・「感動感嘆」「感動詠嘆」に下位分類される．

キャアコップチャイ（2010）の用法分類は②確認用法，③疑念用法や⑤感動用法には細かく下位分類が設定されているが，①推量用法には下位分類が設定されていない．そのため，ダロウの分析（つまり疑問の終助詞カまたは疑問詞が共起しないものということは，それは自ずと推量用法の分析ということになる）を目的とする本稿にとっては，推量用法の細かな分類がないこの枠組みでは都合が良くない．そのため，本稿ではこの枠組みは JCK コーパスのダロウ類出現を概観するためのみに用いる．

次にノダロウの詳細な分析には宮澤（2014, 2018）を援用する．宮澤（2014, 2018）は，文章・談話論的な視点から，論理的な文章[14]や談話におけるノダの機能を分析し，「統括力」「統括の方向」という観点を用い，ノダを 7 種に機能分類したものである．論理的な文章を対象としたものであることと，「統括の方向」という観点を取り入れているため，本稿の目的とする学習者に提示するときに都合が良いと考えたため，この研究を援用する．「統括の方向」とは簡単に述べると，ノダがその機能を発揮するのがノダ文の前文（群）なのか後文（群）なのかということである．例えばノダの典型的な機能としてよく言わ

れる，理由や解釈を表す「関連づけの「のだ」」（庵ほか 2000 : 270）などは，前文の状況と関連づけノダ文でその理由や解釈を述べるというものである．これは前方に統括機能を発揮するものである．もう一つ，後方に機能を発揮するものとして，「前置き」や「先触れ」（庵ほか 2001 : 288）のノダがある．これらは「質問があるんですが〜」などのように，後方の文に統括機能が発揮されているものである[15]．さらにこの統括機能は一つのノダ文が前方へも後方へも発揮する場合があると述べられている．これは，例えば前文には「関連づけの「のだ」」として機能し，後文には「前置き」として機能するという複合的なものである．

以下に宮澤（2014, 2018）の用法分類を簡単にまとめる．「統括力」「統括の方向」という観点があるが，「統括力」は本稿では考慮しないため記述は省略する．

【宮澤（2014, 2018）のノダの機能分類】

①換言
- 「先行文（群）の内容を詳述したり，一般化したりする．」（p.239）
- 「〜ということは，〜ということだ」に当てはまる．統括の方向は前方．

②見解
- 「先行文（群）の内容に対して，話者の主張を加えてまとめる．」（p.239）
- 換言しつつ，筆者の見解が入る．「〜ということは，〜ということだ」に当てはまる．統括の方向は前方．

③結論
- 「先行文（群）から導かれる帰結を述べる．」（p.239）
- 統括の方向は前方．

④概略
- 「新たな話題を概略し，話題の流れを提示する．」（p.239）
- 統括の方向は後方．

⑤補注
- 「先行文（群）の内容に対して，話者（筆者）の考えを挟む．」（p.239）
- 統括の方向は前方．

⑥原因・理由
- 「先行文（群）の内容に対して，原因・理由を述べる．」（p.239）
- 統括の方向は前方．

⑦前提
- 「結論を述べるための前置きや背景説明をする．」（p.239）
- 統括の方向は後方．

これら上述した枠組みを参考に，本稿の調査結果を見ていく．

3.3　調査結果

3.3.1　調査結果の概観

ここでは上記の枠組みに基づき，JCK コーパスの日本語母語話者作文を調査した結果を概観するが，先にダロウ類の使用実態調査の先行研究結果を表 2 にまとめる．

表 2　ダロウ類使用実態調査の先行研究結果[16]

	用法，使用件数，割合					合計
キャアコップチャイ (2010)	①推量用法	②確認用法	③疑念用法	④婉曲的質問用法	⑤感動用法	907 (100%)
	466 (51%)	149 (16%)	228 (25%)	49 (6%)	15 (2%)	
馮 (2019)	推量	確認	疑念		未分類	4000 (100%)
	1855 (46.4%)	371 (9.3%)	1774 (44.4%)		–	
庵 (2009)	推量	確認	不定推量[17]		未分類	412 (100%)
	49 (11.9%)	318 (77.2%)	45 (10.9%)		–	

表 2 に示したとおり，話しことば（庵 2009）では確認用法が 77.2%を占めている．書きことば（キャアコップチャイ 2010，馮 2019）では推量用法が約半分を占めている．キャアコップチャイ（2010）では一般的な文学作品を対象としているため，会話で主に用いられる確認用法の比率が馮（2019）より高くなっている．表 2 からは調査対象によって使用される用法が異なることがわかる．

それでは，JCK コーパスではどうだろうか．その結果を表 3 にまとめる．

表 3　本稿でのダロウ類使用実態調査の件数と割合

	①推量用法	②確認用法	③疑念用法	④婉曲的質問用法	⑤感動用法	合計[18]
全ダロウ類	222 (68.3%)	0 (0%)	90 (27.7%)	12 (3.7%)	1 (0.3%)	325 (100%)
文末形式ダロウ類	169 (63.1%)	0 (0%)	86 (32.1%)	12 (4.5%)	1 (0.4%)	268 (100%)

JCK コーパスの日本語母語話者の特徴[19]は，作文タイプ[20]によって異なるのだが，晩婚化ついて述べる意見文ではいわゆる小論文調，故郷について述べる説明文と趣味について述べる歴史文では，読み手に紹介するような砕けた調子である．ただ，どのようなタイプにしろ，会話の文はほとんど入ることはない．そのため表 3 からも分かるとおり，②確認用法は 0 である．

表 3 の「全ダロウ類」とは，文末に出現する「（ノ）ダロウ．」「（ノ）ダロウカ．」「だろうと．」と，文中に出現する形式である「だろうし」「だろうが」「であろうこと」などの全ての形式を含む数である．本研究では「（ノ）

ダロウ．」の文末形式のみ対象とするため，56 件の文中形式と 1 件のみの文末形式「だろうと．」を除外した「文末形式ダロウ類」268 件について示す[21].

次に本稿の関心事項であるノの有無について見ていく．表 4 に文末形式ダロウ類の「ノ」の有無を用法別にまとめる．左端の「代表形」とは，「ダロウ．」を「だろう．」「でしょう．」「であろう．」を代表させる形とし，それに終助詞「カ」または疑問詞が共起するものを「ダロウカ．」と表記した形である．そのため，「ダロウカ．」の中には実際は「ダロウ．」で終わるものもあるが疑問詞と共起するものはこの形式にまとめる[22].「ノダロウ．」「ノダロウカ．」は上述のものに「ノ」が上接した形である．最後に「(ノ)ダロウ(カ)．」は感動用法に使われる形のもので，ノとカを脱落させても文意にあまり違いが見られない特殊な用い方のため別に示す.

表 4　文末ダロウ類用法別の「ノ」の使用件数

代表形	①推量用法	③疑念用法			④婉曲的質問用法	⑤感動用法		代表形別計
		a.自問	b.断定回避	c.反語		a.感嘆	b.詠嘆	
ダロウ.	153							153 (57.1%)
ダロウカ.		16	43	2	12			73 (27.2%)
ノダロウ.	16							16 (6.0%)
ノダロウカ.		22	1	2				25 (9.3%)
(ノ)ダロウ(カ).						1		1 (0.4%)
用法別計	169 (63.1%)	38 (14.2%)	44 (16.4%)	4 (1.5%)	12 (4.5%)	1 (0.4%)	0	268 (100%)

表 4 から見ると，ノダロウカはほとんどが③a.自問で用いられているのが分かる．そして，それとは違いダロウカは③b.断定回避で多く用いられているが，その他の用法でも出現が見られる．表 4 からはノダロウカの使用される用法が偏っていることが見て取れる.

それでは，ノダロウはどうだろうか．表 4 からも分かるように，キャアコップチャイ（2010）を基にした分類は①推量用法の下位分類がされておらず，これ以上の分析には適さない.

3.3.2　ノダロウの詳細な結果

ここでは上述した宮澤（2014, 2018）の分類を援用し，抽出したノダロウのノダの文中における機能を見てみる．表 5 の横軸は宮澤（2014, 2018）のノダの機能別で括弧内は統括力が前方か後方かまたは両方の複合かを示し，縦軸は上接する品詞別である.

表 5　推量用法のノダロウのノダの機能

	名詞	動詞	い形容詞	計
換言（前方）		5		5
見解（前方）		2		2
結論（前方）			2	2
原因・理由（前方）	1	1		2
概略（後方）		1		1
換言／概略（複合）		2		2
結論／概略（複合）		1		1
原因・理由／前提（複合）		1		1
計	1	13	2	16

表 5 から，抽出した推量のノダロウをノダの機能別に見た場合，いくつかの機能に分類でき，換言の機能が最も多く現れている．

4．考察

4.1　ノダロウとテンスについて

ここでは，2.2 で述べたノダロウ産出に関する問題点を考察する．まず問題点①として挙げた使い分けルールとしてダロウはル形，ノダロウはタ形が上接するということができるのかについて考察する．

2.2 でも述べた通り，ダロウはル形，ノダロウはタ形の動詞が上接しやすいと指摘されている．確かに JCK コーパスからもそのような結果が見て取れる．本稿の調査結果を表 6 に示す．

表 6　推量用法の上接動詞のテンス

	タ形	ル形	計
ダロウ.	2	79	81
ノダロウ.	7	6	13

確かに表 6 から見てもダロウは動詞の未来または現在を表すル形と共起することがほとんどのようだ．ノダロウに関しては表 6 の縦軸の「タ形」から見ると，タ形はノダロウに多く使われている．しかし，横軸の「ノダロウ．」から見るとル形・タ形がほぼ同数となっている．そのため，上接する動詞のテンスからだけでは使い分けを示せるとは言い難い．傾向としては，ダロウはル形と，ノダロウはタ形またはル形の動詞が上接しやすいとは言えるが，使い分けルールとしては不完全である．それは，容易に例外が思い浮かべられるからである．

(3) 彼がその試験問題を見せてくれた．ひどくむずかしい．わたしだったら，全然できなかっただろう．（グループ・ジャマシイ 1998 : 217）
(4) 実験に失敗したのにこのような興味深い結果が得られたのには，何か別の要因があるのだろう．（グループ・ジャマシイ 1998 : 468）

このように用例（3）の「タ形＋ダロウ」，（4）の「ル形＋ノダロウ」は何も問題のない表現である．ダロウ類というのは，現時点において話し手が，あ

る事象（所与）から何かを推量するときに使うものである．そのため，過去を推量するための「タ形＋ダロウ」が存在しなければならない．

以上，ダロウとテンスの関係を見た．確かにダロウはル形と，ノダロウはタ形と共起しやすい傾向にあるが，それを使い分けルールとしてしまうと，例外が多く出てくるのを見た．そのためテンスだけでは使い分けルールとしては不十分であると考える．

4.2　ノダロウと結果推量について

ここでは問題点②として挙げたノダロウは原因推量と結果推量の機能を持ち，ダロウは結果推量の機能を持つため，結果推量をする際，どのような使い分けルールを提示すれば良いだろうかについて考察する．

（5）田中くんからいっしょに帰ろうと誘われたが，忙しかったので断った．彼は一人で帰ったのだろう．（庵ほか 2000：274）

用例（5）を見てみると，ノダロウを用いているが原因・理由の推量とは言い難く，帰結・結果の推量と考えられる．このような場合，確かに（5）はノダロウをダロウに言い換えられるだろう．幸松（2015）が指摘する「〈既定事態推量〉のノダロウ」に当たると思われ，（5）はタ形のため多少の違いがあるが，「「既に定まったこととして推量する」というニュアンス」（p.8）を受ける．

幸松（2015）は，〈既定事態推量〉のノダロウが「ことだろう」と置き換えられることから，このノダロウを「事情を述べる形式として文法化したノダの推量形であるとは考えられず，別ルートを辿って残った形式ではないかと考えている」（pp.19-20）と述べ，ノダの機能が効いていない形式であると指摘している．そして，このような現象は史的変遷の結果であり，これを田野村（1990）の用語である「ノダの「空用」「流用」」[23]ではないかと述べている．つまり，〈既定事態推量〉のノダロウは，「ことだろう」の形式名詞コトがノに代わったものであり，ノダ文由来ではないため，ノダの機能が現れていない，そのためノを脱落させてもダロウとして機能するという主張である．

幸松（2015）は，史的変遷からの考察であり，非常に納得させられる記述である．しかしながら，本稿では，〈既定事態推量〉のノダロウでもノダの機能は効いているという考えに立つ[24]．確かにノダ研究において帰結・結果を用法として明記していないものもある[25]．しかし，益岡（2007：91）では「帰結説明」，范（2016：17）では「帰結」，宮澤（2018）では「結論」などと，帰結・結果の説明をノダの機能用法の一つとして明記している研究もある．本稿もこれを支持するとともに，ノダロウにもノダ由来の帰結・結果を推量する機能があると考える．

そして，このような機能用法を本稿では「結果推量」とひとまず呼んできたが，より実態に則し「非断定結論」と呼ぶことにする．これはラベリングを変えただけであり中身は変わっていない．結果推量の「推量」を「非断定」とし，

「結果」を宮澤の用語にならって「結論」としただけである．これはノダロウがノダとダロウを合わせたものであるため，ダロウの持つ非断定機能と，ノダの持つ「結論」の機能を合わせたものである．以下，ノダロウの機能用法を「非断定〇〇」と記す．〇〇には宮澤（2018）の 7 つのノダの機能用法が入る．

ダロウを「非断定」とすることには異論[26]が出るところではあるが，庵ほか（2000：123）でも「「だろう」は話し手の考えを断定しない（非断定）で述べるときに使います」と述べられているとおり，本稿でもこのラベリングを支持する．それに加え，ノダは前の述語を連体化するノと断定辞のダからなるというような説明をされることが多いが，ノダが断定であるならばそれと対立する推量のノダロウは非断定と考えて問題がないように思える．用例（6）を参照されたい．

（6）バブル崩壊以降，経済が不安定になって，安定した職に就けない若者が増えた．そしてそれは非正規雇用者の増大をもたらした．収入や雇用が不安定な非正規雇用者たちは，将来，子どもを育てるための貯金をすることが難しい．（中略）そのため，このような非正規雇用者たちと結婚しようとする女性は少ない．非正規雇用者たちが増えたことによって，結婚する若い女性も減ってしまったのだろう．（j06-2-5）

本稿のラベリングで言えば，（6）は非断定換言のノダロウの例である．先行文群である波線部の事象（所与）などを下線部のノダロウの文で言い換え（要約）ている例である．（6）は筆者の内省ではノダロウをノダに置き換えられるが，ダロウには置き換えが不自然なものである．ノダロウの文と置き換えたノダの文との違いは，断定しているかしてないかの違いではないだろうか．つまりノダロウをノダに変えても文意は変わらず，変わるのは書き手が断定するか非断定で述べるのかという違いでないかと言うことである．

ここで本稿のノダの扱いについて簡単に述べておく．本稿では庵ほか（2000：270）にならいノダの用法を「先行する文や発話を取り巻く状況との関連づけを表す用法（中略）関連づけとは，ある発話がそれを取り巻く状況と関連があることを示す」とする．ノダの機能をよく言われる，ある事柄の事情や実情を表すと定義してしまうと，換言のノダを説明しづらいためである．換言のノダは先行文群と関連づけ（リソースとし），今まで述べたことのまとめとして換言（言い換えたり要約したり）し述べるという機能であると考える．

さて，話をここでの本題である，結果の推量を表すノダロウとダロウに戻す．（7）は非断定結論の例である．

（7）それは，現在では当然結婚の前段階として定義されている恋愛と，結婚という制度との関係が，ここ数十年で大きく変化し，そのため晩婚化が進んだのではないかと思うからです．晩婚化という言葉が出てきてすらいなかった頃，恋愛と結婚は全くの別物でした．親の

決めた結婚相手と，婚約の際に初めて会うといったこともよく聞く話で，お見合い婚も多かったのでしょう．（j05-2-d2）

（7）では波線部の事象（所与）を根拠とし，昔は「お見合い婚も多かった」という結論を断定せずに述べている．このような結論を述べる文では，昔は「お見合い婚も多かったダロウ」に置き換えが可能である．これは上述したように結果推量のダロウと非断定結論のノダロウが両者とも帰結を述べることができるからであり，違いはノダがあるかないかということである．つまりは関連づけを明示するかしないかの違いであると考える．別の言い方をすると，ある証拠（前提や既有知識，ここでは波線部）に基づき，結論を出したことを示すかどうかということである[27]．例えば，前提（既有知識）である波線部をなくすとどうだろう．

（7’）晩婚化という言葉が出てきてすらいなかった頃，恋愛と結婚は全くの別物でした．お見合い婚も多かったのでしょう．（j05-2-d2 改変）

前提をなくした（7’）では，「お見合い婚も多かったのでしょう」という推量が唐突に出てくる．まるで後方にノダ機能を効かし話題提供をする概略のノダのような使い方だが，後文では「お見合い婚」の話は展開されていない．このように前提を欠いたノダロウ文の使い方は，1 文で見れば誤用ではないが，意見文という文脈の流れで見ると，ここでノダロウを使う理由がなく不自然に感じる．その点，ダロウは根拠がなくても用いることができるため[28]，ただの想像と捉えることができ「お見合い婚も多かったダロウ」でも文脈上問題はない．

つまりここでの議論をまとめると，結果推量（非断定結論）ではノダロウはダロウに置き換えができ，その場合ノダロウを用いると「「既に定まったこととして推量する」というニュアンス」[29]が出てくる．そしてそれはノダの機能で何らかの証拠（前提）を基にした（関連づけした）推量であるため，前提がない場合にノダロウを用いると文脈上不自然に感じる．そのため，前提がない場合は，ただの想像として述べるダロウの文か，後方に効くノダロウ（概略や前提）として用い後文で話題を展開すると自然になる．

4.3　ノダロウとダロウの置き換えついて

ここでは問題点③として挙げた，上述の結果推量以外でノダロウとダロウの置き換えについて，どのような場合置き換えができるのかできないのかを考察する．

表 7 はノダロウがダロウと置き換えられるかどうかを筆者の内省に従ってまとめたものである．縦軸の「??」はダロウに置き換えると文脈上不自然さを感じるもの，「○」はダロウに置き換え可能なもの，「×」は不可のものである．その下の品詞は，ノダロウに上接する品詞別で区分してある．横軸は本稿のラベリングに従って分類したものである．

表 7　ノダロウがダロウに置き換え可能かどうか

	??	×	○			計
	動詞	動詞	名詞	動詞	い形	
非断定換言 ノダロウ（前方）	1	4				5
非断定結論 ノダロウ（前方）					2	2
非断定原因・理由 ノダロウ（前方）		1	1			2
非断定見解 ノダロウ（前方）	1	1				2
非断定概略 ノダロウ（後方）				1		1
非断定結論／概略 ノダロウ（複合）				1		1
非断定換言／概略 ノダロウ（複合）		2				2
非断定原因・理由 ／前提ノダロウ （複合）		1				1
計	2	9	1	2	2	16

4.2 でも述べたように，結果推量と同じ機能を持つ非断定結論では置き換えが可能である．それに加え，後方の文に機能を効かす非断定概略でも置き換えが可能である．（8）に非断定概略の例を示す．

（8）　高望みをする結果，結婚相手が見つからない，と考えるのかもしれない．
もっと狭い範囲で言えば，地域コミュニティの崩壊というのも考えられるのだろう．昔はお見合いをさせられての結婚，地域のつながりの中での結婚，家柄による結婚など，今考えれば強いられた結婚といのも多く存在したのではないだろうか．現在はそういった地域色や家のつながりも薄くなり，比較的自由な結婚が認められるようになってきた．（j11-2-9）

（8）では前文で「高望みをする結果，結婚相手が見つからない」ということを述べ，その段落の話題は終わり，次の段落に入ってすぐ「地域コミュニティの崩壊」という話題が唐突にノダロウ文で出現している．そして，後文の波線部で地域の話が展開される．このようなノダは後文に機能を効かす機能で概略的に後文群に関する話題を提供し，そしてダロウの機能により断定を避け述べている．このような文では，「地域コミュニティの崩壊というのも考えられるダロウ」に置き換えが可能である．これは概略のノダを含めた後方に機能を効かすノダの特徴であると考えられる．通常ノダ文は何かしら前提（多く

は前文に位置する）のもとに語られる．その前提をわざとなくすことにより，唐突な印象を受けるが，それと同時に読み手の興味を惹きつける表現効果があるのだろう．このような文では，ノダ（ノダロウ）をなくすことが可能である．ただ，ノダ（ノダロウ）をなくすことによって，唐突感がなくなり一見スムーズであるが，読み手を惹きつける表現効果もなくなってしまう．

このように後方のみに効く概略のノダロウはノダを脱落させることも可能であるが，前方と後方に機能を効かす複合的なものは，多少複雑になってくる．（9）は非断定換言／概略のノダロウ，（10）は非断定結論／概略のノダロウの例である．

（9）　現在はそういった地域色や家のつながりも薄くなり，比較的自由な結婚が認められるようになってきた．そんな自由であるがゆえに結婚相手が見つからない，ということも十分考えられることだ．これらをひっくるめて結婚観が変化してきたということが言える．様々な要因から，「結婚は必ず通る道」という考えが薄くなってきたのであろう．昔は結婚が当たり前であったし，女性が家を守るものだと考えられてきた．（j11-2-a1）

（10）　いままで述べてきた晩婚化の理由を考えれば，男女のさらなる均等が叫ばれている現代では，晩婚化がさらに進んでいく未来が見える．対策も進んでいくのだろう．考えられる対策とすれば，離婚のリスクを減らすなどだろうか．（j11-2-12）

（9）では，当該文以前に述べたてきた「結婚観が変化した」（波線部）ということを「「結婚は必ず通る道」という考えが薄くなってきた」（下線部）と別の言葉で言い換えている．そして，後文（二重下線部）に対して，「考えが薄くなった」内容を述べるための概略的な話題提供もしている．（6）や表7 からも分かるように，非断定換言はダロウに置き換えることが難しいため，（9）でも置き換えは不可となる．ただ，概略の文では（8）について上述したように置き換えられるため，例えば前文を排除すれば置き換えが可能となる．

（9’）今の日本では「結婚は必ず通る道」という考えが薄くなってきたダロウ．昔は結婚が当たり前であったし，女性が家を守るものだと考えられてきた．（j11-2-a1 改変）

（9’）のように，話題を提供するための概略的使い方をし，その後，なぜ「「結婚は必ず通る道」という考えが薄く」なったかを後文で説明するという使い方であれば，ダロウに置き換えられると思われる．

（10）も前方と後方に機能する複合のものである．前方には「晩婚化がさらに進んでいく未来が見える」ことを根拠に，「（未来では）対策も進んでいく」という結論を言い切らず非断定の形で述べている．後方には「（未来は）対策

も進んでいく」という概略的な話題提供をし，後文で未来の晩婚化対策の話題に繋げている．（10）の場合，結論も概略もノダをなくすことができるため，複合であっても，ダロウに置き換えが可能となっていると思われる．

そして表 7 にもあるとおり，非断定原因・理由のノダロウと非断定見解のノダロウは置き換えが難しいと思われる．（11）に非断定原因・理由，（12）に非断定見解の例を示す．

（11） それまでは音楽というものには全く興味がなく，唯一の接点が学校の音楽の授業だけというような有り様だった．初めてハマったアルバムは，おそらく CHEMISTRY のどれかだったように記憶している．CM か何かに起用されていたのだろう．（j18-3-1）

（12） 全体として女性も男性も初婚の平均年齢があがるとそれだけ結婚時の互いの所得も高く，結婚式や住居・教育費にかけるお金も以前より高水準になる．それら結婚にかかる費用の相場があがることで結婚というものへの参入障壁があがるのだろう．（j12-2-6）

（11）の非断定原因・理由は，本稿では今までひとまず原因推量と述べてきたものである．波線部の「初めてハマったアルバムは，おそらく CHEMISTRY のどれか」を結果とし，ハマった原因を下線部の「CM か何かに起用されていたのだろう」と言い切らず非断定の形で述べている．原因推量はノダロウの最も主要な機能であるため，ダロウに置き換えると不自然さを感じる．

（12）は非断定見解の例である．見解のノダは，換言と似ているが，換言は先行文で述べたことを言い換えたり要約したりし繰り返しに近く，段落や先行文群をまとめることが多いのに対し，見解は換言しつつも何かしら新しいことを述べている．（12）は波線部の先行文で「結婚式（中略）にかけるお金も以前より高水準になる」ことを述べ，二重下線部で再び同じような内容の「結婚にかかる費用の相場があがること」に言い換えている．（12）は換言に近いが，下線部の「結婚というものへの参入障壁があがる」という新たな意見が出てきており，見解のノダとした．（12）はダロウに置き換えることは文脈を考えると不自然と感じ，筆者の内省では「??」（表 7）とした．

さて，ここで最後に今まで述べてきたことの例外を紹介する．非断定原因・理由のノダロウは最も主要な機能であるが，表 7 からも分かるように，ノダロウに上接する名詞の列に 1 つ置き換え可能の「○」がある．用例（13）にそれを示す．

（13） 自分で作ってみてそれを食べる，一見こんな単純なことなのに，夢中になっている自分がいました．やはりそれなりに楽しむことができたし，自分の腕がどんどん上がっているということを自覚できるというのも，喜びを増幅させていた理由なのでしょう．（j20-3-d2）

（13）では，作文作者の趣味である料理について，波線部で「夢中になっている」と述べている．そしてその理由を下線部で「楽しむことができたし，自分の腕がどんどん上がっているということを自覚できる」ことを言い切らずに述べている．これをダロウに置き換えてみるとどうだろうか．筆者の内省では問題なく置き換え可能と判断している．さてこの名詞が上接する場合をどのように考えれば良いだろうか．この場合は，例外的に理由の推量であっても置き換えが可能とする．

大鹿（1995：539）でも，「名詞述語文に「だろう」がともなったものは，（中略）動詞や形容詞に「だろう」がともなった文とやや性格が異なる」と述べられている[30]．しかし，「らしい（のだろう）」と「だろう」は置き換えると「意味が全く同じというわけではないし，表現価値も異なる」（p.539）とも述べられており，置き換えはできるが違いはあり，名詞述語文では「らしい（のだろう）」は原因推量として，「だろう」は結果推量の枠組みを維持したまま推量ができると指摘されている．

このように名詞述語文では置き換えができるとされているが，全てがそう言えるかと言えば，問題はそこまで単純ではない．

表 8 は推量用法のダロウに名詞が上接した用例を集め，それがノダロウに置き換えができるかどうかを調べたものである．これを見ると置き換えが難しい場合の方が多いことがわかる．下記に置き換えが難しい例を示す．

表 8　ダロウに名詞上接時の置き換え

	名詞			計
	??	×	○	
ダロウ.	4	14	8	26

（14）　ここでは，三重県出身の私が実際に訪れたり食べたりした結果，自信を持ってお勧めできるものを挙げようと思います．有名なものですと，まずは伊勢神宮でしょう．（j21-1-d2）

（14）は例示する何かを挙げるというパターンである．これらは 1 文で見ると置き換えが可能な場合もあるが，文脈で見ると置き換えは不自然である．これらはキャアコップチャイ（2008）が指摘する「列挙」に近い用法と考えられる．この用法は「名詞に接続する「だろう」には，1 つ 1 つ確認しながら例をあげていく用法がある」（p.93）とされ，ダロウの特殊な用法の 1 つとされている．次に別の置き換えが難しい例をあげる．

（15）　唐突だが，私は朝起きるのが苦手だ．小学校から高校まで，朝礼の直前にギリギリ学校に駆け込むのが日課だったといっても過言ではないだろう．（j10-3-1）

（15）は固定化されたような言い回しの例である．この「過言ではないダロウ」は 4 件，「列挙」は 7 件見られた．次の（16）は置き換えが可能と判断した例である．

（16） 渋谷にはどんなイメージがあるだろうか．「ヤンキーの街」とか，「ギャルの街」とか挙げる人が多いのではないだろうか．間違っていないと思う．というか正解だと思う．実際，最も渋谷という街を愛し，毎日通い，知り尽くしているのは，そういったあまり育ちがよろしくなさそうに見える若者たちであろう．（j06-1-a1）

（16）では，「～若者たちなのであろう」とすると「「既に定まったこととして推量する」というニュアンス」が感じられる．

このようにダロウに名詞が上接する場合，多様なパターンがある．そのため本稿では複雑化を避けるため，ノダロウからダロウには置き換えが可能であるが，ダロウからはノダロウには置き換えができないとしておく．そのため使い分けルールとしては，ダロウに名詞が上接する場合はノダロウとはしないというルールで問題は起きないと思われる．

ノダロウとダロウの置き換えについての議論をまとめる．4.2 で述べたとおり，結果推量のダロウと機能が同じである非断定結論のノダロウは置き換えが可能である．後方にノダの機能を効かす非断定概略のノダロウは置き換えができるが，唐突な話題提供という表現効果はなくなる．前方と後方にノダの機能を効かす複合的なものは，前方にノダを効かす換言や原因・理由がある場合は置き換えが難しい．ノダロウをダロウに置き換えてしまうと，非断定換言では段落をまとめるという換言のノダの機能を失い，繰り返す必要性がないのに同じ主張を繰り返すことになり不自然な文脈になってしまうからである．原因・理由はノダロウの主要な機能であるため，ダロウに置き換えが難しい．しかし，ノダロウに名詞が上接する名詞述語文の場合は例外で置き換えが可能であるが，ノがなくても問題はないため，ダロウに名詞が上接する場合はノダロウにしない方が問題は起こらない．

4.4　ノダロウのまとめ

ここでは，最後に学習者に提示する使い分けルールとしてまとめる．これまでの議論は学習者にとって全てを頭に入れる必要はもちろんない．それをできるだけ簡略化しまとめる．

ノダロウは前提や先行文（群）または後文（群）と関連づけ，書き手の意見を言い切らず非断定の形で述べる．そして，前提や前文を証拠（根拠）とし，それと関連づけて原因・理由や結論を述べる．また話題（段落）のまとめとして，先行文群を言い換えたり要約したりして話をまとめる．また後文と関連づけることもでき，その場合は後文で述べることの話題を提供する．唐突に概略や前提を述べるため，後文でそれについて話題を展開することが必要である．

ノダロウがタ形が多いのは，原因・理由を述べる機能がダロウにないためである．ある事象（所与）の原因・理由は，通常は過去の話になる．そのため，ノダロウにタ形が多いが，これは結果的にそうなったわけで，タ形がノダロウと必ず共起するとは言えない．同じく，ある事象の帰結を述べるということは，

多くはその未来を述べることになるため，ダロウにはル形が多いが必ず共起するとは言えない．

ノダロウとダロウが置き換えられるのは，基本的にはノダの機能の違いによってである．換言や原因・理由では置き換えると文脈的に不自然になる．そして，結論や概略では置き換えられるが，すでに定まったことというニュアンスが出てくる．

表 9　産出のための使い分けルール

使用場面	ダロウ	ノダロウ
・先行する文を要約したり，言い換えたりして，段落（話題）をまとめる場合（非断定換言）． ・先行する文の原因や理由を述べる場合（非断定原因・理由）．	×	○
・名詞が上接する場合． （ノダロウを使える場合もあるが，ノダロウを使うと問題がある場合がいくつかある．そのため産出時にはダロウが無難である）	○	×
・先行する文の帰結や結論を述べる場合（非断定結論）． （ノダロウを用いると，すでに定まったことというニュアンスがでる．そのため未来を表す場合，そのようなニュアンスが出ると都合が悪いことがある[31]） ・後続の文に関する話題を唐突に提供する場合（非断定概略）． （ノダロウでは読み手の注意を惹きつける効果がでる．後続の文で話題を広げないと不自然になる．ダロウでも良いが表現効果はなくなる）	○	○

今までの議論を表 9 のようにまとめる．もちろんより細かいルールはあるのだが，複雑すぎるルールは学習者のみならず日本語教師でも覚えることができないだろう．そのため，かなり簡略化したものを提示した．教える際は，当然であるが，ノダとダロウが既習であることが前提となっている．

5．おわりに

本稿では，ノダロウには前方に機能を効かす非断定換言，非断定見解，非断定結論，非断定原因・理由の機能があり，後方には非断定概略があることを明らかにした．そして，ダロウとノダロウの使い分けルールをある程度整理し提示することができた．ただ，これは文末形式の推量用法（つまり肯定文）のみと限定した結果である．加えて，表 9 は作文を集めた JCK コーパスが基となっており，会話文などは一切考慮に入れておらず，論理的な文章である作文以外の文章でも対応しきれない場合もあるだろう．つまり非常に限定された結論であることは否めない[32]．そのため，今後の課題としては対象の範囲を広げ，その統一的なルールを考えていく．

参考文献

庵　功雄（2009）「推量の「でしょう」に関する一考察−日本語教育文法の視点から−」『日本語教育』142(0), pp.58-68, 日本語教育学会.
庵　功雄（2015）「「産出のための文法」に関する一考察 −「100%を目指さない文法」再考−」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三（編）『文法・談話研究と日本語教育の接点』pp.19-32, くろしお出版
庵　功雄ほか（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
庵　功雄ほか（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
井島正博（2018）「逆行推論について」『成蹊大学文学部紀要』(53), pp.193-207, 成蹊大学文学部学会.
大鹿薫久（1995）「本体把握−「らしい」の説−」『日本語の研究　宮地裕・敦子先生古稀記念論集』pp.527-548, 明治書院.
奥田靖雄（1984）「おしはかり（一）」『日本語学』3(12), pp.54-69, 明治書院.
奥田靖雄（1985）「おしはかり（二）」『日本語学』4(2), pp.48-62, 明治書院.
金　乾雄（2019）「ノダロウのスコープをめぐって」『日本語・日本文化研究』(29), pp.330-339, 大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻.
キャアコップチャイ　ソムピット（2008）「「だろう」の四用法について−先行研究の分析から−」『学習院大学人文科学論集』(17), pp.73-109, 学習院大学.
キャアコップチャイ　スィラッサナン（2010）「「だろう」の意味・用法−小説における分析−」『日本語／日本語教育研究』(1), pp.157-176, ココ出版.
グループ・ジャマシイ（編著）（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版.
白川博之（2018）「日本語研究から日本語教育研究への越境」『日本語の研究』14(2), pp.68-83, 日本語学会.
田野村忠温（1990）『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』（2002 年再刊）和泉書院.
中畠孝幸（1997）「日本語の推量表現について−ダロウとマイ−」『甲南大学紀要 文学編』(107), pp.27-42, 甲南大学.
日本語記述文法研究会（編）（2003）『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』くろしお出版.
野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版.
范　一楠（2016）「日本語学習者のノダの使用と習得に関する研究−<承前のノダ>と<後続のノダ>の違いを中心に−」博士学位請求論文, 神戸学院大学.
馮　雁鴻（2019）「ダロウの使用実態−BCCWJ を用いて−」『國文論叢』(54), pp.131-115, 神戸大学文学部国語国文学会.
益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探求』くろしお出版
三宅知宏（2010a）「「推量」と「確認要求」−“ダロウ”をめぐって−」『鶴見大学紀要 第 1 部 日本語・日本文学編』(47), pp.9-55, 鶴見大学.
三宅知宏（2010b）「「不定推量」と「質問表現」−“ダロウ”をめぐって(2) −」『鶴見大学紀要 第 1 部 日本語・日本文学編』(47), pp.57−75, 鶴見大学.
宮崎和人（2012）「認識的モダリティーとテンスの相関性−小説の調査から−」『日本研究』(51), pp.27-47, 韓国外国語大学校日本研究所.
宮澤太聡（2014）「統括機能から見た文末叙述表現「のダ」・「んダ」の異同」『大阪観光大学紀要』(14), pp.15-24, 大阪観光大学.

宮澤太聡（2018）「JCK 作文コーパスにおけるノダの統括機能による文脈展開の特徴」『中京大学文学会論叢』(4), pp.246-228, 中京大学文学会.
宮澤太聡（2020）「論理的な文章・談話におけるノダの機能について」『中部日本・日本語学研究会（第 85 回）発表資料』, pp.1-22, 中部日本・日本語学研究会.
幸松英恵（2015）「<事情推量>を表さないノダロウ−準体助詞ノを含む推量形式に見られる 2 種−」『学習院大学国際研究教育機構研究年報』(1), pp.3-22, 学習院大学国際研究教育機構.
吉田茂晃（1988）「ノダ形式の構造と表現効果」『國文論叢』(15), pp.46-55, 神戸大学文学部国語国文学会.

使用データ

『JCK 作文コーパス』〈http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus/〉2020 年 9 月閲覧

---

[1] 以下，「のだろう」「んだろう」「のでしょう」「んでしょう」「のであろう」「んであろう」を含め「ノダロウ」とする．同じく「だろう」「でしょう」「であろう」を「ダロウ」と記す．

[2] 「使い分けのルール」とは，学習者が産出時に類似語彙を使い分けるための目安となる指針，規則を想定している．白川（2018 : 69）では「母語話者であればなんとなく納得してしまう説明であっても，学習者にとっては不十分であり，もっと踏み込んだ使い方の説明がなければ具体的な場面に応じて適切に運用することができない」とし，記述的研究で明らかにされた意味，用法とは別の説明が学習者（日本語教育研究）には必要であるとの認識を述べている．

[3] キャアコップチャイ（2010），馮（2019）などではノダロウは考察対象外か，ダロウと区別されずに扱われている．

[4] ノダロウのこのような意味機能は，大鹿（1995）の「帰結・原因推量」，幸松（2015）の「〈事情推量〉のノダロウ」に相当すると考えられる．推量の方向性から考えると井島（2018）の「逆行推論」に当たる．

[5] このような意味機能は大鹿（1995）の「帰結・結果推量」に相当し，推量の方向性から考えると井島（2018）の「順行推論」に当たると考えられる．

[6] 引用の用例の場合，括弧内に出典先を示す．用例の下線は引用者による．

[7] 三宅（2010a）によると認識的モダリティとは「命題の真偽に関する話し手の認識を表す意味成分」（p.16）とされ，具体的には「推量」のダロウ，ウ／ヨウ，マイ，「実証的判断」のラシイ，ヨウダ，ミタイダ，ソウダ，トイウ，「可能性判断」のカモシレナイ，そして「確信的判断」のニチガイナイ，ハズダのことである．

[8] 括弧内は JCK コーパスの作文情報を示している．（j11-2-9）のはじめのアルファベットは国籍を，その次の数字は作文作者の ID 番号，中央の数字は作文のタイプ（1（説明文）, 2（意見文）, 3（歴史文））を表しており，ここまでは JCK コーパス内の整理番号である．最後尾の数字は本研究内での筆者による用例整理番号である．（j11-2-9）は，日本語母語話者（Japanese）の ID11 番の人物で，そして，2（晩婚化の原因とその展望について述べる意見文）の作文タイプであることを表している．

[9] ダロウの機能に関して三宅（2010a,b）では大別して「推量」「確認要求」「不定推量」が挙げられ，そしてその下位分類がいくつかに分けられている．ダロウ類の大まかな用法分類に関しては，本稿はこれを支持し論を進める．

[10] 使用されたコーパスは『女性のことば・職場編』『男性のことば・職場編』である．

[11] 使用されたコーパスは『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）である．

[12] 馮（2019）では割合表示はされていないため，46%というのは引用者が計算したものである．詳細は以下の通りで，ランダムにピックアップした 4000 件のうち，推量用法が 1855 件，確認用法が 371 件，疑念用法が 1774 件である．

[13] 『JCK 作文コーパス』は，科学研究費補助金「テキストの結束性を重視した母語別作文コーパスの作成と分析」（2013 年度～2015 年度，基盤研究（C），研究課題番号:25370577, 研究代表者:金井勇人）の研究結果として作成されたコーパスである．日本語母語話者（Japanese），中国語母語話者（Chinese），韓国語母語話者（Korean）による日本語作文が全 180 本収録されている．作文執筆者の属性は，日本在住の日本人大学生, 日本語能力試験の N1 合格者および合格相当の力を持っていることが確認された中国在住の中国人大学生と韓国在住の韓国人大学生である．

[14] 宮澤（2020 : 1）によると「「論理的な」文章は，読者に新たな情報を伝達することが目的の文章」とされている．そのため，分析対象としているものは，講義の談話，新書の文書，大学生の作文が納められている JCK コーパスである．

[15] このようなノダの方向性に注目したものとしては范（2016）が挙げられ，そこでは「承前のノダ」と「後続のノダ」としてラベリングされている．

[16] 調査結果の出典は，キャアコップチャイ（2010 : 159）の表 1，馮（2019 : 125）の表 3，庵（2009 : 59）の表 1 からである．なお本稿の表 2 はキャアコップチャイ（2010）の用法分類に従って，馮（2019）と庵（2009）の用法ごとの調査結果を引用者の見解に基づき当てはめたものである．そのため正確には各先行研究の用法分類の対応関係は一致しないかもしれないが，研究結果の目安として示す．

[17] 庵（2009 : 59）の表 1 では，実際には推量と確認の 2 つの用法のみに分類されており，「不定推量」の項は立てていない．ただ各用法の末尾形式の詳細数が書かれており，そこには「か（ね）45」と書かれており，本稿ではそれを「不定推量」とカウントした．なお「不定推量」とは三宅（2010b）からである．

[18] 前述した検索条件下での日本語母語話者作文の全ダロウ類合計は 328 件であったが，誤記 1 件，対象外 2 件を除いた．

[19] JCK コーパスの特徴について宮澤（2018 : 246）では「日本在住の日本人大学生の作文は，文体が統一されておらず，また，主観を排除したいわゆる論文調の文体ではなく，口語的な表現が散見するため，ノダの用いられ方が文章的なものと談話的なものとが混在しているという特徴がある」と述べられている．

[20] JCK コーパスには 3 つのタイプの作文があり，「説明文（自分の故郷について）」、「意見文（晩婚化の原因とその展望について）」、「歴史文（自分の趣味（昔から続けていること）について）」がある．1 つのタイプにつき 1 本 2000 字で計 60 本（各母語話者 20 本ずつ），3 タイプ合計 180 本の作文が収録されている．

[21] 文中形式は「（ノ）ダロウ＋助詞類など」であり，複文の従属節または主節であったり，名詞修飾節であったり，一つ一つの出現数自体は少ないが使われ方が多様であり，使用実態から使い分けルールを提示するためには JCK コーパスではデータ数が足りないと考えるため，本稿では除外する．「だろうと．」も同様に一件だけの特殊な文末形式のため除外する．

[22] このような不定推量のダロウカの扱いは三宅（2010b）に従う．

[23] 「その本来の機能を無視して用いられていることになるから，「のダ」の流用の現象と言ってよいと思われる．あるいは，意味上の理由なしに用いられているわけであるから，「のダ」の「空用」とでも言うべきかも知れない．」（田野村 1990 : 134）

[24] 幸松（2015）の〈既定事態推量〉のノダロウとして例で挙げられた例（本稿の（1）に当たる）は，本稿のラベリングでいうと非断定結論のノダロウになると思われる．

[25] 吉田（1988）ではノダの持つ表現効果を，《換言》《告白》《教示》《強調》《決意》《命令》《発見》《再認識》《確認》《整調》《客体化》と細かく分類しているが，帰結・結果の説明は表現効果ではないからか明示されていない．

[26] 奥田（1984, 1985）では，ダロウは結果として《不たしかさ》を表すが，「推量の表現であることを否定して，断定をさけるための表現であるとする（中略）理解のし方は，そうかんたんに承認するわけにはいかない」（奥田 1984 : 57）と非断定について異論を述べている．

[27] ノダロウとダロウの違いとして証拠性をあげる研究は中畠（1997）や宮崎（2012）などいくつかある．

[28] 中畠（1997 : 30）では，「ノダロウが事態を前にしての推量を表すのに対し，ダロウが必ずしも現実に即した推量ではない」と述べ，証拠となる事象がある場合はノダロウであり，そうではない場合はダロウとの見解を述べている．野田（1997 : 212）でも「「だろう」（中略）は，特に根拠を示さずに話し手の判断を述べることができる形式である．（中略）状況と判断との関係は明示されないので，その関係を示すためには対事的「のだ」が用いられる」と述べている．

[29] ノダの特性で田野村（1990）が主張する「既定性」に通じると考える．

[30] 大鹿（1995 : 539）では「らしい」と「だろう」が置き換え可能ということについての考察であるが，その流れの前には「確かに，「らしい」と「のだろう」は，多くの場合それほど意味の違いを感じさせない言い換えが可能」（p.538）とあり，実際挙げられた例文の「あそこに座っているのがこの学校の校長らしい／だろう」（p.538）では，「らしい」は「のだろう」に言い換えが可能である．大鹿（1995）でも述べられているが，「らしい」と「のだろう」は置き換え可能な場合が多く類似した表現であるが，「のだろう」しか使えない場合もある．しかし，ここでは「らしい（のだろう）」として論を進める．

[31] 幸松（2015 : 7）では，「「すでに定まっている事態として述べる」という表現性が，ややもすれば，突き放した物言い，他人事のような物言いをしているようにも聞こえさせる」と述べ，以下の例文を挙げている．このような場合，ノダロウは文法的には問題がないが，語用論的に避けるべきと指摘している．

Q：「先生，私の論文はうまくいくでしょうか？」
A：「あなたのことですから，うまくいくでしょう／うまくいくんでしょう」
（幸松 2015 : 7，引用者により一部改変）

[32] 宮澤（2014, 2018）の枠組みではノダには 7 つの機能があると述べられているが，本稿ではそのうちの 2 つの機能は見られなかった．今後は対象コーパスの規模を大きくすることも視野に入れたい．

Distinction of "*Darou*" at the End of the Sentence Depending on the Presence or Absence of "*No*": Based on the Actual Usage of Japanese Native Speakers Essay

MATSUMOTO Masafumi

In this paper, we considered distinction of the conjectural expression *darou* and *nodarou* that appear at the end of the sentence. It has been said that *nodarou* could be classified into cause conjecture and result conjecture. In this paper, it is clarified that there are other usages based on the actual usage of JCK corpus's essay by Japanese native speakers, and they are classified into several categories according to the function of *noda*.

In this paper, we consider that *nodarou* is associated with the premise and the preceding sentence (group) or the following sentence (group), and the writer's opinion is stated in a non-assertive form. And *nodarou* can be classified into non-assertive paraphrases, non-assertive views, non-assertive conclusions, non-assertive causes / reasons that function forward, and non-assertive outline that functions backward. Then, the rules for distinction of *darou* and *nodarou* were organized and presented to some extent.

Non-assertive paraphrases, non-assertive views, and non-assertive causes / reasons *nodarou* can be seen as unnatural in context when replaced by *darou*. Non-assertive conclusion and non-assertive outline *nodarou* can be replaced by *darou*, but there exists some differences; as for non-assertive conclusion *nodarou*, it contains the nuance of "The matter has already been decided"; as for non-assertive outline *nodarou*, it has the effect of attracting readers. Therefore, it should be noted while using non-assertive conclusion *nodarou* to describe the future. And since non-assertive outline *nodarou* becomes unnatural if there is no further development on the topic in the latter context, attention should be paid to when use it.

Keywords: *Nodarou*, *Noda*, JCK Corpus